

不登校と家族

School Absenteeism and Family

永井 広克
NAGAI Hirokatsu

1. 増加する不登校

2007年8月10日付の北日本新聞朝刊によれば、2006年度の県内の不登校の小中学生が前年度より84人増加した。その数は1035人で、5年ぶりに千人を超え、小学生は49人増の233人で過去最多となった。中学生は35人増の802人で、全児童・生徒に対する割合は小学校が0.4%で、全国平均の0.3%を上回り、低い方から34番目で、中学校は2.7%で、全国平均の2.9%を下回り、低い方から18番目だった。不登校のきっかけは、病気以外の本人の問題、友人関係、親子関係、学業不振が多い、という。

富山県だけでなく、全国的にも5年ぶりに増加した。そのきっかけは友人関係や親子関係といった人間関係によるものが多い。県教委によれば「全国的な傾向としてコミュニケーション能力が低下し、精神的に不安を持つ子どもが増えている。無理して学校に行かなくてもいいとする保護者の風潮もある」と分析している。

コミュニケーション能力ということばを近年、よく耳にする。自分の考えをはっきり相手に伝え、相手の言葉にしっかり耳を傾け、それに対して自分がまた応答するといったことばのやり取りのことであろう。人間は他者とことばをやり取りすることによって、社会生活を営んでいる。児童生徒は家庭では親やきょうだい、祖父母、学校ではクラスメイトや先生と常日頃、ことばを交わしながら家庭生活や学校生活を送っている。自分の気持ちや意思を親、きょうだい、クラスメイトや先生に伝え、逆に親、きょうだい、クラスメイトや先生の気持ちや意思をことばを通して受けとめる。

だが、コミュニケーション能力には単にことばのやり取りだけでなく、いろいろな人と話すことができることも含まれる。気軽に雑談できる能力ともいえる。気軽に雑談できる人はふつう気心の知れた人である。児童生徒にとってそれは親やきょうだいである。学校のクラスメイトや先生は家族に比べ、気軽に接することはできない。相手のことがよくわからないし、相手が自分のことをどのように思っているかはっきりしない。家族がわりと見通しが良い林であり、自分に危害を加える者がいないのに対し、学校は不気味な他者がうごめく密林なのである。密林は何が出てくるかわからないし、自分に危害を加えるものがあるかもしれない。したがって学校へ行くことに対し、不安をいだくこともありうる。暖かい家庭にまどろんでいる児童生徒ほど、家庭の外に広がる学校という密林に対し不安を覚える。だから学校へ行くことに対し、恐怖や不安を覚える。

一方、不登校を容認する親がいる。いやな学校には無理に行かなくてもかまわない、と子どもに告げる親がいる。子どもが不登校を始めた当初は登校させようとするさまざまな手段を講じたであろうが、子どもが言うことを聞かないと、あきらめて通学しなくてもかまわないという気持ちになったのであろう。たしかに現代では勉強する気になれば、必ずしも学校に行かなくても勉強できる。家庭教師に習ってもよいし、インターネットなどニューメディアを利用して勉強できる。でも、そのような家庭学習だけでは、知識は身に付けることができても、本来、学校生活で学ぶ人間関係を学べない。そうなる中成长しても社会生活を満足に営めない人間に

なるおそれがある。フリーターならまだしも、ニートやひきこもりになるおそれがある。また不登校を容認する親も不登校の経験者だったこともありうる。自分の経験を振り返り、子どもが不登校に陥ってもなんら対策は講じない。そうすると不登校の世代的な連鎖が生じる。

ともかく不登校の増加は子どもの側であれ大人の側であれ、家庭内の問題でもある。人なれしていない子どもと、社会のルールを体得させることができない親の問題ともいえる。そこで本稿では、不登校と家族の関係を考察し、不登校を解決する方策をさぐってみたい。

2. 不登校の歴史

不登校とは文部科学省の定義によれば「なんらかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因、背景により児童生徒が登校しない、あるいは、したくてもできない状況にあるために、年間 30 日以上欠席したもののうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」となっている。

この定義より以前は 50 日以上欠席したものとしていた。そして 1982 年には不登校の原因・背景を、本人の性格傾向、家庭、養育者の態度、養育者の性格に分けていた。それによれば、本人の性格傾向は、1.不安傾向が強い 2.優柔不断 3.適応性に欠ける 4.柔軟性に乏しい 5.社会的・情緒的に未成熟 6.神経質な傾向が強い、である。家庭、養育者の態度は 1.過保護 2.いいなり 3.過干渉、である。養育者の性格は 1.父親は、社会性に乏しく、無口で内向的、男らしさや積極性に欠け、自信欠如であり、2.母親は、不安傾向を持ち、自信欠如、情緒未成熟、依存的である。

いかにももっともらしい不登校の原因・背景だが、現実には当てはまらないことが多く、1992 年には文部省は不登校の生徒の属性はなんら問題がなく、誰にでも起こりうる、とした。不登校には明確な原因とか背景はなく、それらを探しても無駄であると、お手上げ状態に陥ったのである。

そこで不登校の歴史を概観すると、「行きたいが行けない時代」から「行かなければならないが行けない時代」から「行きたくないから行けない時代」へと移り変わってきた。不登校の生徒の型も、学校恐怖型から登校拒否型、脱落型へと変化した。学校へ行き、勉強すべきだという規範はしだいに薄れ、学校へ行かなくてもかまわないという風潮が生まれてきたのである。不登校という用語も、文部省が原因・背景探しをやめた 1990 年代初めから見られるようになった。はっきりと登校を拒否するのではなく、登校する気は多少なりともあるのだが、いざ登校しようとする、腹痛や頭痛など何らかの身体的不調が表れるのである。

不登校などの教育問題を時代的に概観すると、1960 年代では非行や暴走族など「学校の外」で起こり、1970 年代では校内暴力など「学校の中」で起こり、1980 年代では登校拒否や中退など「学校の拒否」となり、1990 年代では不登校など「学校の無視」が起こる。学校は今や児童生徒を吸引する力を弱めている。

不登校を考えるには、学校の吸引力と家庭の押し出す力の両面をみななければならない。両者の力が大きければ不登校は起こらないが、どちらかが弱いと不登校が起こる。現在は学校の吸引力だけでなく、家庭の押し出す力も弱まっている。プルとプッシュがどちらも弱まっている。

日本の家族は母子連合が強いが、教育問題に絡めて時代変化を概観すると、1960 年代は父親を向こうにまわした母子連合で、父子関係は「甘えたいのに甘えられない」ものだった。1970 年代はますます不在化する父親を排除した母子連合、1980 年代は経済の不況から脱するために、ますます帰宅が遅くなった父親を冷たく拒否した母子連合、1990 年代は父親を無視した母子連合である。通学しないことが登校拒否から不登校へと変化したように、父親の拒否から父親の無視へと変化する。父親はいてもいなくてもよい存在になったのである。あるいは 90 年代は「甘えたいのに甘えさせられる」になった。父親は学校になぞらえることもできる。どちらも社会規範を体現している。

父親と母親の養育態度は異なる。母親は一般に子どもにやさしく接する。日本の家族は母子連合が強いとい

うことは、やさしさが家庭にのみならず、社会全体に蔓延しているとも言える。やさしさは時代によって変化する。1960年代は、ことばにならない領域の精神活動のことであり、1970年代は、生き方を含む対抗価値つまり「モーレツ」対「やさしさ」のことであり、1980年代以後は、他者との一定の距離を保つ生活態度のこととなる。かつてある出版社が「たくましくなければ生きていけない。だが、やさしくなければ生きていく資格がない」というレイモンド・チャンドラーの『長いお別れ』の中の、私立探偵フィリップ・マローのせりふを引用して、宣伝文句にしたことがある。「モーレツ」だけでは生きていくことにならず、「やさしさ」が伴わないと人間らしい生き方はできないと主張したのである。当時、モーレツからビューティフルということばも流行した。また国際婦人年を契機にして、女性の地位や人権が向上していった。そんな時代状況を背景にして、やさしさは世の中に蔓延していった。

そして現代では、やさしさは他者と一定の距離を保った生活態度となっている。その影響は生活や遊びの変化に表れている。つまり子どもたちの遊びは、①群れて遊ばない ②体を動かさない静的な遊びで ③ひとりだけ閉じこもって自閉的な遊びをし、④他の子どもともまれないので、社会性が育たなくなっている。

家庭ではきょうだいの数が少ないうえに、隣近所でも似た年頃の仲間がいないので、家の外で体を動かして仲間と遊ぶことがなくなっている。そのことが不登校を生むひとつの土壌である。

不登校を考えるキーワードは、①思春期と青年期のはざまの危うさである。心と身体が刻一刻変化する思春期は何かと心が不安定になる。人の視線にも鋭敏になる。学校では、同級生や下級生、先輩、そして教師の視線にたえずさらされる。それがいたたまれなく不登校になることもある。また思春期は性別があらわになる時期でもある。青年期になり、自分の性別が受け入れる気になるまで、心は微妙に揺れ動く。②やさしさの虐待とその結果である。やさしさは時代のよって内容が異なるが、ここでのやさしさは一定の距離を保つ生活態度のことである。親は子どもの欲求をなにかとすぐに満たそうとする。ほしいものをすぐに買い与えるだけでなく、いやなことは極力させないようにする。食べ物の好き嫌いから始まり、はては学校嫌い、不登校にまで至る。放任とは異なる真綿で首を絞めるような行為である。③親の未解決な問題が子どもの問題を形成することがある。親、とりわけ母親にとって子どもが夫の代わりとなる。モーレツ社員で家庭を顧みない夫に代わって子どもが夫の役割を果たすのである。アダルトチルドレンも親の意向をすばやくつかみ、親の期待に沿うように行動する子どものことであり、自分の欲求を素直に出さず、親の欲求を自分の欲求よりも優先する。その結果、子どもは思わぬところで社会に適応できなくなる。④生活問題としての不登校である。夜更かしをして朝、目が覚めないのである。夜型の生活をしているので、朝が苦手なのである。社会全体が夜型生活になっているのに加え、親も残業やテレビの視聴などで夜型の生活をしているので、子どもも大人の影響を受けるのである。

3. 不登校の型

いちがいに不登校といってもさまざまな型がある。①医療型 ②在宅自閉型 ③在宅解放型 ④非在宅校内型 ⑤非在宅校外型 ⑥非行犯罪型である。

①医療型は、心身の治療が必要で、精神症状や神経症のような症状や心身症などの症状が出る。自殺や拒食や自傷行為などの行為障害を持つ子もいる。②在宅医療型は、自宅ないし自室に閉じこもっている。多くはゲームやテレビ鑑賞などの生活を中心としている。家族か家族の特定の人以外の接触を嫌い、窓を閉め切って昼夜逆転の生活をし、家庭内暴力をふるう子もいる。③在宅解放型は、在宅し明るく生活している。友達がくれば遊ぶ。権利としての不登校をしている子、なんとなく不登校している子がする。大半の子は対人関係の過敏症を特徴とし、時間の経過と共に自閉型に移行する子もいる。④非在宅校内型は、保健室・相談室・図書室・校長室などに登校する。体調不良を訴え教室に入らず集団でたむろしている子もいる。⑤非在宅校外型は、校門前やコンビニ前、駅の周辺にたむろしている。タバコ・ピアス・茶髪を特徴とし、シャツを出してズボン

腰にひっかける共通のスタイルを持つ。出席をとったあとに集団学校離脱をするが、めったに学区内から出ることはない。⑥非行犯罪型は、薬物依存・風俗・売春・窃盗・殺人などの犯罪をおかす。多くは不良仲間との交遊から家出ないし外泊を繰り返し暴走族や犯罪組織との関係を強める。

解決の主体は①医療型は医療、②在宅自閉型は福祉、③在宅解放型は家庭、④非在宅校内型は家庭と学校⑤非在宅校外型は学校、⑥非行犯罪型は司法と地域である。

そこで本稿では、家庭が解決に主体となる③在宅解放型と④非在宅校内型を主に扱う。

また、これらは3つのブロックに分かれる。①見守るべき型で医療型が属し、②早急に再登校に向けて対処する型と③さまざまな情報を得ながら進路を決定していく型には在宅自閉型、在宅解放型、非在宅校内型、非在宅校外型、非行犯罪型がそれぞれの状況に応じて属する。

4. 不登校の地域性

大規模不登校が多い地域がある。第1に、ベッドタウン化が進む新興住宅地にあるマンモス校である。それまで田畑や山地だったところに都心に通勤する会社員の戸建てや集合住宅が建ち、たくさんの小中高生が通学する学校が出現する。「男は仕事、女は家庭」の性役割を実行する核家族で、似たような職業、年齢の親や子どもたちが集まって住んでいる。

第2に、都市文化と地方文化が混在する地域である。都市と地方では生活様式や価値観などが異なるが、不登校に関しては都市が多いとも地方が多いとも一概に言えない。どちらかといえば都市が個人主義的で世間がなく、地方は集団主義的で世間があるとも言えるが、そのどちらかが特に多く不登校を生じさせると断定できない。このような地域は、都市文化と地方文化の2つの価値観が混ざり合っている。どちらにも学校に通学すべきだという価値観はあるが、強弱の程度が見られる。学校に対する期待や願望もやや異なる。

そんな地域にはアノミー状態が出現しているし、地域コミュニティも崩壊している。同じ地域に住んでいる住民の交流が少なく、世間が形成されていない。世間は人の目とも言える。人の目は世間体となり、人々の行動を規制し、社会規範から逸脱した行動を思いとどまらせる。不登校という逸脱した行動を思いとどまらせる。

また地域コミュニティが崩壊しているだけでなく、家庭内では親子のコミュニケーションが希薄化している。親が子どもを放任・無視し、一緒に過ごすことや、一緒に遊ぶことも会話することも少ない。

不登校は基本的には日々の暮らしや生活の問題である。夜更かしをして、朝、目が覚めないことが不登校の症状のひとつだが、親が早寝早起きの生活習慣を身に付ければ、子どもも自然に早寝早起きの習慣が身につくやすい。親は居場所などといって、子どもの心を理解しようと腐心するより、自分のふだんの生活を見直し、早寝早起きの習慣を身に付けることを心がけるべきである。

5. 家族の変化

地域社会が変化すると共に、家族も変化している。

第1に、地域社会からの分離である。高度経済成長と共に、地域社会が崩壊するにつれて、家族と地域社会との交流が薄れていく。家族が地域社会から孤立していくのである。子どもたちも放課後や休日に、近所の子どもたちと遊びに興ずることがなくなる。ちなみに、地域社会からの分離は、近代家族の特色である。近代家族とは、親密性、情緒性といった家族感情を特徴とする。子どもが家族生活の中心になり、子どもの世話をする母親役割が神聖視され、家族はしだいに奉公人などの非血縁者を排除し、社交を切り捨てて閉鎖的集団になる。近代家族の誕生の背景には、生産の場が家族から工場に移されて市場が成立し、公共領域と私的・家内領域とが明確に分離されたことがある。

第2に、一世帯当りの人数が減少する。核家族化と共に世帯人員が減少する。拡大家族が減少すると共に、子どもの

数も減少している。一人っ子や二人っ子が増加し、きょうだいがいないか、いてもその数が少ないので、きょうだいげんかも余り見られなくなっている。

第3に、子どもと家族が隔離する。今や家族とは家族員が寝る場所にすぎないというホテル家族ということばもある。子どもが個室を持ち、そこでテレビやゲームを一人で楽しみ、友だちとケータイで会話を交わす光景が日常的になった。世論調査では、生きがいは家庭団欒という回答が多いが、現実には家庭団欒が消滅したからこそ、夢や願望の意味合いもこめて家庭団欒と答えるのであろう。家庭団欒が消滅したということは家族の会話も少なくなっている。

第4に、家庭生活のシンプル化とシングル化である。家族の機能が減少し、家族の外で家族員が生活を楽しむ傾向が強まっている。冠婚葬祭は今では家族外の専門機関で行なうことが一般的となり、家族全員で生活を楽しむことも少なくなっている。家族内でも家族外でも人々は個人化しつつある。

家族の変化は家族関係の変化をもたらす。

第1に、核家族化である。祖母や祖父と一緒に暮らす子どもが少なくなり、親とだけ暮らす子どもが増加している。祖父母、親、孫といった三者関係ではなく、親と子どもといった二者関係のみで家庭生活を営んでいる。祖父母が同居していると嫁姑関係に代表される家族葛藤も生じやすいが、老人をいたわるやさしさや人の死を味わうこともない。

第2に、母親の不安が高じてきた。日本の母親は子どもへの愛情を心配や不安といった形で表すことが多い。子どもの言動に何かと不安になり、自分の思い通りに育てようとやっきになり、その結果、子どもに何かと口やかましく干渉する。また母親の不安が子どもに知らず知らずのうちに乗り移り、子どもが神経質になったり、何かとおどおどする。

第3に、父親の不在である。長時間労働と通勤時間の長さのために、父親が家にいる時間が少ない。在宅していたとしても、頭の中は仕事のことでいっぱいである。不況、リストラ、失業、解雇など安穩としていられない状況が追い討ちをかける。子どもたちと顔を合わせる時間もないこともある。そうなると会話も当然ない。物理的に父親が存在していても、心理的には存在しない。そうなると父親は不登校などの家族問題が生じて責任逃れをする。おまけに子どもが父親や夫の役割を演ずることもある。子どもが、母親の夫の役割を演ずるのである。

第4に、母子の密着である。母子の間に割って入るべき父親が不在なので、母親と子どもが物理的にも心理的にも密着してしまう。そのような状態になると、母親は子どもとの関係に安らぎを求めようとする。住宅ローン、学費、自分たちの老後、夫婦問題、老後の介護の問題など、他人には言えないことでも子どもに聞かせようとする。幼い頃はそれでもかまわないが、思春期を過ぎても必要以上に母親と子どもが密着する。さらに必要以上に母親をいたわる。それが高じると、男の子の場合は母子相姦、女の子の場合は、一卵性母子になる。

6. やさしさの落とし穴

不登校の原因として、かつて旧文部省は本人の性格や家庭の様子を取り上げたが、その数年後には原因を特定できず、どんな子どもや家庭にも不登校は起こりうる、と訂正した。不登校の原因はわからないと告白したのである。しかし、不登校はやさしさの落とし穴に落ち込んだ状態とも言える。

やさしさの落とし穴とは第1に、可能性を示して現状を正当化するやさしさである。不登校の経験は将来役に立つという言い回しである。将来のことは誰にもわからないのに、可能性を示して現状を正当化することは、問題を回避することになる。

第2に、美しい言葉で現状をとりつくろうやさしさである。これは「学校に行かなくなっても、生き生き生活していればいいじゃないですか」というせりふに代表される。美しい言葉で現状をとりつくろう言い回しは、口にする方は気持ちがいいが、言われた方はみじめになる。

第3に、「・・・はともかくとして」というように問題を曖昧にするやさしさである。「学校へ行くか行かないかはともかくとして、大事なのは子どもの個性」という言い回しである。個性はけっして単独で存在するものではなく、他者との関係のなかで初めて生まれる。だから「・・・はともかくとして」という言い回

しは問題を曖昧にし、言われた方ははぐらかされた気持ちになる。

第4に、選択肢の多様性によって、責任を回避するやさしさである。「・・・のような方法もあるし、・・・のような方法もあるのだから、悲観することはありません」という言い回しである。選択の自由とは、何を選んでも自分は責任を取りません、あなたの責任です、ということである。選択肢の多様性を強調されるほど、かえって孤独を意識させられ、気が重くなる。

やさしさの虐待は学校でも起きる。教師は授業だけでなく生徒指導など仕事が山積みとなり、疲労困憊している。始業ベルが鳴っても教室に入らなかったり、授業中歩き回ったりする生徒がいたりして、学級は崩壊寸前である。教師は学級を維持し運営することで頭がいっぱいである。

やさしさの虐待は地域社会にもある。不況、環境問題、ごみ問題、住民間の対立、犯罪の頻発などにより地域社会も疲れている。そんな社会では子どもが多少、逸脱行動をしても大目に見て注意しない。見てみぬふりをするのである。

このように、やさしさの虐待を助長する要因は、家庭・学校・地域のどこにでもある。日本社会にはやさしさの共同幻想が蔓延している。やさしくしていれば、子どもは必ず自ら気づいて、自ら律して変化するという共同幻想がはびこっている。

近年、不登校もひとつの選択とか、権利だとか言われることもあるが、不登校をしてはいけないのは、子どもは自立しなければならないからであり、親は子どもを自立させなければならないからであり、社会は子どもの自立を保障しなければならないからである。子どもの巣立ちは、動物すべての原理・原則で、義務である。義務は子どものみならず社会にも課せられている。社会の義務を課せられている場が学校である。人間は子どもと両親だけでは巣立ちはうまく行なえない。社会において義務を課せられる場がなければならない。

物事には必ず二律背反があるが、やさしさも同様である。プラス面は、保護する、親切にする、繊細である、などである。相手を思いやり、相手のために積極的に良いことをする。マイナス面は、やさしさを発揮する者が上位で、受ける者が下位に位置することになる。その結果、やさしさを受ける者の自立を阻み、場合によっては、与え手と受け手の間に性的な問題を生じさせることもある。

やさしさが受け手の自立を阻むケースとは、障害を持った人への手助けは、その人の自立を妨げない範囲内で行なうべきで、度を越した手助けは、受け手の自立への意欲までも消滅させかねない。不登校をしてもかまわないと放置すると、子どもの登校しようという意欲までも削ぐことになる。性的な問題とは、母親が過度に息子にやさしく接すると、息子が自立した男性になることが困難になる。親であれ、学校であれ、地域社会であれ、やさしさがあふれると、子どもがその中で溺れ、自立や成長が妨げられる。

さらに親のやさしさという虐待を受けて育った子どもは、親の期待を読み取り、推測し、それにそって生きようとする。しかし、そうした良い子はいずれ親の期待を満たすことに絶望し、さまざまな要求をするようになる。あげくの果ては親へ暴力を振るうことにもなりかねない。

7. 不登校の克服

不登校の種類や不登校児の年齢などがさまざまであり、不登校を克服する万能薬はない。でも不登校児を立ちなおさせる方法がある。

まず第1に、家族の役割である。思春期から大人になるということは、自我を育て精神的に自立する作業で、最終的には父親や母親からの心理的・経済的な別れの作業である。でも、親との別れや子どもとの別れができない親が増えている。親がいつまでも子どもとのことをかかえこんでいると、子どもが親に依存して相互的に依存関係になる。親と子どもがもたれあって、自分の足では立てないのである。その状態で思春期を過ぎると、子どもは、ある意味で家族構成員の役割不足を補う能力があるため、父親の存在が希薄な家庭では、父親役割、

母親役割を補うことにもなる。そのため、とくに母親との心理的な別れの作業が遅々として進まない。

親が本来の親役割を担うということは、義務と責任を果たすだけでなく、子どもが本来の子どもの位置に降りることができることである。時には親に甘えるという本来の安心感を得ることもでき、一方では、家族の規範に規制されながら、忍耐力やがまんを学ぶことになる。

第2に、自由の病理性を自覚することである。子どもを自由に伸び伸びさせることと、子どものすべてに主権を明け渡し、親が背負わなければならない責任を回避することを、はきちがえている親がいる。ここから先は子どもの自由にならないという親の責任の範囲が設定されていない。親は子どもをなるべく自由にさせ、子ども自身にいろいろと判断させ主権を与えようとする。でも子どもの権利や個性を認める裏には、必ず責任が伴わなくてはならない。

第3に、家族ルールを作ることである。子どもというものは本来わがままなものである。それを根気よくしつけていくのが子育てである。子育ては親の忍耐力にもかかわる。子どもに「ノー」ということは非常にエネルギーがいる。子どもはつねに自分の欲求のおもむくままに勝手な要求を突きつける。その要求は思春期を過ぎるといっそう増してくる。そのつど、親はその要求を受け入れていいかどうか、どのくらい受け入れていいかを考えなければならない。その受け入れ程度によって子どもは良くも悪くもなる。そこで門限や食事の形態をはじめとして、生活全般の細かい見直し作業を根気よく行なう必要が出てくる。

第4に、夫婦関係の強化である。直系家族規範は薄れたとはいえ、子育ては祖父母が援助すべきだという考えが残っている。事実、子どもの世話を祖父母にまかせる親も多い。しかし、そうすると本来の家族範囲の認識をあいまいにし、親という責任から逃れる方便となりやすい。また心理的に祖父母からの自立を遅らせることにもなり、祖父母もいつまでも子や孫にしがみつくとになりやすい。夫婦と祖父母の共同の子育ては、核家族よりも理想的に見えるが、子どもにとって誰が父で誰が母なのか定まらないことになる。それを防ぐためには、子どもを育てしつけるのは祖父母よりも親だということを、親や子どももしっかり自覚しなければならない。そして不登校児の親は、父親と母親とで真剣に問題を直視し、子どもを登校させるという目標に向かって夫婦関係を強化し、夫婦関係を強化し、生活全般を変えるべきである。夫婦が連合して核となり、子どもとの間に境界を作ることである。そして父親が手をさしのべて、「お前は社会に必要とされている」「ぜったいにあきらめない」「親の責任だ」「お父さんが見守っているから大丈夫だ」と告げる。子どもには、つらいことに耐えること、いやなことから逃げないこと、将来のために勉強すること、人との関係をつくること、無理をしなくてはならないこともあることを学ぶことを体得させなければならない。

※本稿は、2007年11月7日富山県高等学校教育研究会生徒指導部会で、筆者が行なった講演をもとに執筆したものである。

参考文献

- | | | | |
|------|-------------------|--------------|-------|
| 石川瞭子 | 『不登校と父親の役割』 | 青弓社 | 2000年 |
| 石川瞭子 | 『不登校から脱出する方法』 | 青弓社 | 2002年 |
| 石川瞭子 | 『不登校を解決する条件』 | 青弓社 | 2007年 |
| 三池輝久 | 『学校を捨ててみよう!』 | 講談社α新書 | 2002年 |
| 津谷治英 | 『不登校だった僕から君へ』 | 神戸新聞総合出版センター | 2000年 |
| 藤田英典 | 『子ども・学校・社会』 | 東京大学出版会 | 1992年 |
| 五十田猛 | 『ひきこもり 当事者と家族の出口』 | 未来社 | 2006年 |
| 清水勇 | 『なぜ学校へ行けないのか』 | ブレーン出版 | 1992年 |

荒川龍 『「引きこもり」から「社会」へ』 学陽書房 2004年
門脇厚司 『親と子の社会力』 朝日新聞社 2003年